聖教理證小引

聖教の道大光明根あり源あり愈駁して愈明越究れば越深く人をして篤信實行せしむ然ども當代教友の著書多しと雖も道理抄畧にして外教の駁問に回答する能はず卒は辭窮り理遁るゝに至り聖教の英名を瀆し外教の嘲を惹く見る實に悲む可きに屬す吾今謭陋を避けず博く諸書中最も淺近の詞を選輯し原本の理證を取て校正增補し以て外教

素常の間に對答し以て其心を服し其疑を解
其毀謗を免るゝを爲し或ゝ其を引き教を奉
ぜしむる者也又當に辨駁の法を知べし譬へ
ば客あり來て聖教の道理を駁す先づ當ま曰
ふべし足下既れ辨駁を要さゞ必ず義理を以
て天秤と爲べし理是ならゞ則ち是あり理非
あらゞ則ち非あり暴言强詞にして理を奪ふ
可からず理を講ずる者は君子、蠻を行おふ者
ゝ小人、吾ら寧ろ君子と爲り小人と爲らず又

當に先問を待て而後答ふ可し否されば則ち
其意に中らず比べば他特に來て祖宗を敬そ
るの禮を問ふは若汝先風水の妄を開かゞ則
其意に合ゝを以て頃刻ゝして去るを致し聖
教の眞理を聞く能ゝず若し彼先に口を開か
ずんゞ當ま彼に向て曰ふべし我らの聖教の
道たるや本信實にして妄あし然れとも辯せ
ずんば則ち明あらざ明あらざれは信せゞ信
せざれゞ則ち行おわれず今足下既に來りし

は必定心懐に疑ひあらん眞言問駁を妨げを
吾必ず將に謹で愚衷を陳じ以て之を解んと
す俗語に云眞光大地を出て普世の暗を去り
正道耳み入て心中の惑を解く光到れば暗滅
ぶ能く正道を知り能く生死を別ち能く取舍
を知り能く百工を興す萬民此に賴て以て今
世の安生を得疑解け心定りて則ち意を誠に
す可く則ち身を修む可く則ち治を齊す可く
則ち巧を立つ可し神靈此に依て以て後世の

永福を獲ん幸甚々々

特18
168

聖教理證卷之一

天主二字の解を論ず

客曰爾等敎を奉ずるの人天主を恭敬せり知らず天主の二字何の解か特より來りて敎を請ふ

曰天主の字天より非ず理より非ず氣より非ず性より非ず物より非ず鬼神を指すより非ず乃ち天地萬物を造るの大主にして万民の公父万國の公主なり始もなく終もなく全能全知全善至尊無對なる者にして黑必利語にては耶何巴と稱し辣丁語にては陡斯と稱す然るに同一なる造物主を指の語にして吾朝の天御中主尊及び詩書の上帝佛家の大日の如きは究竟造者主宰の意なきに非ずと雖も彼れ盡く誤謬あるとを免れざる者也抑も天地万物の主あるに猶ほ國の君あり家の長あり

身の首あり子の父あり木の根あり水の源あるが如し夫國君なければ則國治まる能はず家長なければ則家齊ふ能はず身首なければ則生ある能はず木根なければ則長ずる能はず水源なければ則流るゝ能はず是故に天主在らざれば天地万物有る能はず今試に之を論ずるに時辰儀を見れば其製造工あるを知り家屋器械を見れば其造作匠あるを知る天地風雲日月星辰四時代序草木禽獸等百般の事物を見れば必其造物主あるを知る也故に哲人君子は之を察知し其主宰あるを信じ各之を書に記載せり如何んぞ疑を容べけんや

客曰爾等奉敬人の外天主を信ずる人有らざる也曰く万國万代万民が天主を信ずる者也二千年前羅瑪都に

於てシセロンといふ大學者の曰けるやう夫人間たる者は能天主を悟れる也万民の中に於て極めて野蠻なる人類は天主の性質善事を全く知らざれ共責て彼御者が坐すあり

と明かに悟りたりと

又同都の學者セネカの曰へる樣万民の共に在ることを信ずると見る時は彼事は眞に實ありとの証據あるなり故に我等は神が有る也と推して之を悟る也其故は万民は如何程野蠻なりとも神を信ずれば也とポルタルクといふ學者の曰に世の中の國州を巡歷すれば多少の市街中にも城郭なく學術も無法律もなく金銀等を用ゆることなしと見聞ることあり然りと雖も神を信ぜずして殿堂も設けず祈禱及び祭を捧て神より幸を祈り凶惡を逃れんと希ざる人は

未だ見掛ざる也我之を思に市街を建設する爲め地形をあすよりも神を信ずることゝ肝要也といへり右の三人の學者ゝ外教の者あれども万民が神を信ずると証するあり又其餘釋氏ゝ扨置亞西亞東部に於ても孔子老子孟子等及び詩人其外古帝古賢皆天主あるを知り自餘の外教の學者も殘らず此の如く述たるを記録し書載たりき彼等皆曰へる樣時として神の性質を能悟らざれ共神を信ぜざる一門の民もなしと是眞に信實の言辭也と謂ふべし今次第を逐て左に開陳す請ふ其義を了解せよ

其一　古の諸國ゝ天主の性質善事を悟り違ひたれ共何國にも神を信ぜしと見ゆ最古の記録を讀む時ゝ明か也左れ共此れゝ如德亞の民を論ぜざるなり彼等ゝ實の天主を不斷信奉拜禮する故也加爾德亞厄日多波斯天竺亞瞬皮亞厄勒齊亞羅瑪等の人民ゝ盡く神たる者を信じて殿堂を建て教師を置き祈禱牲祭を捧げ儀式を定め祝日を立けりと古の記錄者ゝ此の段に付て明白に證したりき

其二　當今に至りても凡そ世の中に神を拜禮せざる人民なし亞細亞亞弗利加亞美利駕の各大洲及び太平海の群島に至る迄如何なる野蠻の人にても神を信じて之を拜禮し牲祭を捧ぐる抔の儀式を行へり羇旅の人々ゝ日に外人の未だ知らざる邊境に入る時是等を見て之を證する也爰に吾日本國人或ゝ佛を信じ或ゝ神を拜禮する也其中儒家者流ゝ佛を信仰せざれ共孔子の書を讀む時ゝ造物主あるを必ず信ずるに至る孔子も亦屬天或ゝ上帝と稱すれば也推

て之を見れば萬代萬國萬民ハ己より上たる者を信仰し之を神として拜禮すると明白ヨ悟る也

然れば此萬民が神を信ずることハ天主の實ヨ坐す也との顯證あり如何とあれば舊新兩約の聖書ヨ曰ハるゝが如く開闢の始より天主が屢人ヨ現れ其性質を示し其善事を知らしめ森羅萬象を作り玉ひたるをいひ顯し終ヨ天地萬物を以て其智惠善德を人々ヨ示し玉ひたり又一切の人間が殘らず同じき元祖より出たるに仍て古の人ハ其子孫ヨ天主の坐すことを傳へ知らしめたるを以て當今ヨ及ぶ迄至上の神靈が在すなりと萬民ハ之を信ずる也

客曰く古と方今の人多勢萬々の神佛を立て以て天主を信ぜざる者也吾日本國人を見ヨ

日吾日本國人の如く他の國々も時として僞の神佛を設たる事の有は是亦天主の實ヨ坐す也との證據あり、其故ハ人間の繁生するヨ從ひ人々が各相分れ諸方に散居すれ共造物主の坐すことを更ヨ忘れざれば也然といへども日々惡事ヨ溺れ私慾ヨ貪たりしかば天主が惡事を罰し玉ふと悟りつゝ之を恐れて天主の代りとして恐るべからざる神佛を設けたりし夫のみあらず惡事ヨ深く溺れぬるヨ從ひて人ハ自らの心を安んぜしむる爲ヨ其僞りある神佛ヨも同じき惡事を貪しけり他國を差置き先古の羅瑪と厄勒齊亞國を例ヨ引ヨ彼兩國ヨハ邪淫の女神を立て倫盜の神を設けつゝ各罪惡の邪神を拜禮したりき

余ハ右の事柄を畧して之を言んヨ抑萬民が神を信ずるハ

開闢の始より天主が顯れ玉ひたる故也其後代々よ國々が偽ある、神佛を設けたりしかゞ天主の坐すと知つゝも彼を只管恐れて惡事を罰せざる神佛を拜しけり人間が日々愚惡に陷りて盲目となり且當今野蠻の國々よ於て見らるるが如く愚なる者を拜むよ至りたり兎も角も萬民が証據して實の天主ゝ坐す也と明かよ示す者也

客曰森羅萬象自然と有故其作者あらざる也曰汝試よ自然の字を能見よ凡物造物の主よ依ずして自然よ出來るの理あし自然とゝ天主の全能よ依て物の成就するを知ずして其成就せしを見て自ら然く出來りと觀して未知の天主の全能を形容する辭あらずや試よ看よ人々ゝ美麗なる譜請を見れゞ必しも之を建たる人有と推て知あり時計を見れゞ必しも之を作りたる工匠ありと推して悟るあり段匹衣服帽子靴などを見る時ゝ彼是を作りたるゝ人よ非ざるありといはんや況してや天地萬物を見る時彼等を作り出したる作者ある也と推して知るべし此作者ゝ即ち天主よ非ずんゞ是誰なるぞや一切人間が盡く房屋器物を造ると雖も一疋の虫一本の草一粒の種を決して造る能ゝず若し天主が此等を作り出さゝれゞ彼等がある事あし仍て森羅萬象ゝ造物者が坐すありと明白に示すもの也抑も萬物を思考せよ其數へ難き數を考へ其妙なる安排擺列を見其奇なる生育の聯續などを熟案する時ゝ必しも我等推して謂ん扨も彼是を造りたるものゝ全能全知全善なる哉天地風雲日月星辰四時代序草木禽獸等百般の物を見れゞ必其造物主

あるを知り其主宰あるを信ぜずんばあらず

予此より森羅万象の美事を論ぜんと欲するなり實に吾日本人が熟案する時は必ず天主ハ坐す也と悟りあん夫のみならず天主の廣大無邊ある能智全徳を分別すれば彼御者ハ不斷恭敬拜禮愛慕せらるゝべしと知道するあるべし

先人々が毎日天地日月星辰陸海草木國州禽獸あどを見れ共何の故ゝて盲目の如くゝあり決して其造物主を悟らざるや扨も私慾ゝ溺れて此世の墓あき財樂をのみ貪りつゝ造物主を恭敬拜禮愛慕するを厭へばあり是悲歎の至りあらずや

夫万物ハ造物主の能智をよく顯す者也森羅万象を見以て

其安排擺列を甚だ感心せよそも此物が盡く自然に做りたると曰ふ能ハず自然といふハ決してなきものあれば也無き物ハ爭か万物を造る權あらんや爭か万物を整齊する權あらんや森羅万象ハ極めて美麗あるゝ依て此等を造り出し此等を整へたる者ハ極めたる權力極めたる能智を持者あるべし此段を證するが爲ゝ四ヶ條を例に引ん

第一　書冊を讀む時何れか其文字は自然ゝありたりといふべけんや假令ハ孔子の書を讀む人ハ其文字ハ自然ゝ集りて其文道をあせしといはゞ他の人ハ皆之を笑ひ狂人と稱せん蓋し天地萬物ハ孔子の書よりも幾千か奇妙あらずや

第二　我等若道路ゝ於て近邊ある家ゝて閑雅ある奏樂の

あるを聽あゞ鼓琴或ハ琴が自然よなりて其糸が自然よ其器よ掛りたり且自然よ音を發すると曰はんや扨も此樂器を作りたる人あり此人ハ勝れたる上工ありと曰ひ又も其を彈じて樂をあす人を讃美せん今天地の安排擺列ハ樂器よりも千萬の美麗よあらずや之を作り出せし御物ハ即ち人間よりも勝れたるありと悟るべし

第三　爰よ或人は難船して當時人の居らざる孤島よ着して彼所よ於て美麗ある石像を見出しあゞ直ちよ推して謂はん當今ハ此島よ人が居らざれ共必ず其以前ハ居たりき此石像を見れゞ利發なる人の名作なりと知る也若却て此人の曰へるよハ彼美麗なる石像は人が造らずして只自然よありたり實よ規則よ從ひてよく彫刻せられて其寸法整

く揃ひたり然るよ地震或ハ風雨の爲よ山より轉落して暴風よ吹れ自然よ其臺石の上よ建たりと語りあゞ之を聽く人ハ彼輩を嘲りつゝ決して信ずまじ蓋し天地万物ハ如何ある石像よりも美麗よ非ずや彼等が自然にありたりといふ事を得んや

第四　時辰儀を見れゞ何れか謂はん此時計の針ハ能廻れども之を作りたるハ時計師よ非ず其金鎖ハ自然よなりて其中の機關の器械は自然よ其中よ入り針は自然よ其表面よ附着したりと若此の如く曰ふ人あらゞ彼を狂人といふはあしからざる也

蓋し書冊音樂石像時辰儀は自然よ出來たる也と謂ふは陋愚の論あれゞ天地萬物が自然よありたりと謂へるは至陋

至愚の論あるべし

先世界の總景況を見る時は賢き人ハ夫を感じて直ちに之れを作りし作者を悟り其全能を讃歎して其心切を感謝するあり夫天地日月星辰と空氣雲水あぞは抑も人間の爲に作られ感心にも其使用を聽く者にして太陽は我等を照らし暖め草木等を生長せしめ月と星辰は暗夜を照し水は万物を潤し空氣は呼吸を助くる者あり陋愚ある者は之を思案せずして太陽をバ平生の燈火とし空をバ家の天井の如く思へ共賢き人は却て之を思案し万物を感じ己れよりは地球は大ひに見ゆと雖も森羅万象と比較すれバ只塵埃の如しと悟りつゝ終に自己が何れより出て地球の上に住するやと考へ又必ず全能全智ある作者より此世に置れしと信ずるあり

天主の全能全知全善を論ず

客曰何を以て天主ハ全能全知全善と云ふや

白一ハ天主無よりして天地万物を造り材料を用ひず心力を勞せず時刻を費さず有るを命ずれバ則有り成を命ずれバ則ち成る生を命ずれバ則ち生じ死を命ずれバ則ち死す故に之を全能と謂ふ則ち此に大自在と稱す二ハ天主獨り天地万物を造るのみならず又萬物の形を識り而してこれを安排し各其所を得せしめ而してこれを保存し又天下萬民の善惡各心中の隱念を洞燭してこれを賞罰せざるハなし故にこれを全知と云三ハ全善の宗萬美の源あり而して絲毫の缺欠あることなし天地萬物の美好皆天主より蒙庇

せざるあし故よこれを全善と謂なり

天主ハ何爲ゾ人を生じて其人に惡あるを論ず

客曰天主既よ是全善あれバ何を以て人を生じて其人よ惡あるや

曰く天主靈性を人よ賦したるや其原本皆善なること猶水の下よ就くがごとし故よ人不善あること善有れバ惡有ること晝夜のごとく黑白のごときに非るか而して人ハ善を爲べく惡をも爲べし時として自主の儘に行へバ惡を爲ざる能ず彼元祖も亦自主を以ての故よ惡よ落入たり然れバ天主ハ憫然として之を救ひ給んとし給ふもの也人間の元祖たる亞黨と厄娃と作り玉ひし時よ自主の權を與へ玉ひたり若自主の權あくんバ人間たる者ハ實よ惡をも

行ふ能ハず善をも又行ふ能ハざる也若夫此の如んバ焉ゾ能德を修め功を立るを得んや必ず禽獸と異なるあき也天主則ち人間の元祖を作り自主の權を授け玉ふより彼等よ善惡を擇べることを與へたり夫のみならず彼等よ自然善よ偏る靈性を與へて後亦惡を逃し善を行ハん爲よ其合力を與へ玉ふが故に人間の元祖ハ右の善を備ふれども遂よ我意を主張して惡をあせし豈天主の誤ならんや譬へバ父母皆子孫の賢を望みて撫育すれども時として暴虐不孝なる者あらバ豈是父母の誤あらんや今それを畧言せん人の靈性が天主の手より出し時よ皆善ありしが人の誤の爲よのみ惡とありし者よして是必ずしも天主の全善を汚さい

る也

方今人々が惡をなすハ則ち自主の權を惡しく使用する而
已蓋元祖の犯罪よりて其子孫たる吾人ハ實ニ惡ニ偏る
者也是則ち原罪の罰跡也然りと雖も如何なる人ニても惡
を逃し善を行ふの權ハ未だ全く殘りたり或ハ善を行ひ或
ハ惡をあすハ盡く人ニ屬する也且又天主ハ人を善ニ導く
が爲絶ず合力を與へ玉ふ若之あれども人ハ我意を張て惡
を行ふも決して天主の誤ニあらず

何爲ゾ天主ハ猛獸を生じて人を害するこを論ず

客曰天主全善萬物を生じて生を發ふ何爲ゾ猛獸蛇蟲を生
じて人を害するや

曰く天主の諸類を造るや人用の爲にす人を害するの爲に
非ず次で人天主に背しにより彼等も亦人ニ害を爲すニ到

れり然れども今人其害を知て又益あるを知らざるハ其一
を知て二を知らざる也夫れ牛洩馬勃虎骨熊胆蜈蚣蝎子蛇
退蝮蛇等の用を見ニ我等盡く其用を知らざれども蓋し天
地間の萬物一として無用の者あるべきニ非る也

剩へ右等の種々の物は人間の爲ニ害ありと雖も此人間の
罪の爲ニのみ害とおる也其最初天主彼是を作り玉ひたる
時皆人の益とおりしが人間は天主ニ背きて惡を犯せし時
其罰を直ちニ受たりき人が天主ニ違背せし如く其造作の
物ども人ニ違背するは最のことあり終ニ天主之を造り
以て其全能を顯し而して宇宙の美を增す譬ハ光あり暗な
くんバ何を以て晝夜を成さんや白あり黑あくんバ何を以
て五色を分たん甘あり苦あくんバ何を以て五味を別たん

や故よ萬物の中大小好惡を論ぜず皆吾人の有益たり又天主善獸を生じ以て我等の功を修め德を立るを助け而して其賞を授く惡獸を生じ以て吾等の罪惡を責め以て其罰を懼れしむ

何爲れぞ天主終り無きと謂を論ず

客曰天主始もなく終もなしと聞くが故よ敢て問ふ天主何ぞ始もなく終もなしと謂や

曰く夫万物ハ始ある者なれば必ず彼等を作る天主ハ始ある者也若始あらば何れよりして作られしや自らよ作らると能ハず未だ有ざれば也又他の者よりして作らるゝ能ハず蓋し天主の外何の者も有らざれば也若天主が他の者より作られしといはゞ其者ハ必ず始ある者あらん故よ天主ハ万物の源あるよ依て始なき者あり

我等有始無終の者よりして無始無終を論ずるハ蓋し夏蟲の積雪を知らず矇眼の色光を疑ふ者あり然れども凡そ理を推して之を觀せよ夫無上至尊無邊無量廣大圓滿無對の者あらば如何ぞ終始あるべき究竟始終を備ふる此世界の眼を以て見れば此俗觀を離る能ず夫天地も亦終始あれば也然れども其造者主宰の地位を備さよ觀すれば必無始無終たるべきハ必然に非ずや今人此地位の觀よ入り難きハ得生以來有形の者のみを見るよ依てあり

何人か天主を見たるを論ず

客曰天主ありと雖ども何人か見を得るや

曰く當よ我等の敬する所の天主ある者ハ何者たるを知る

べし所謂上天之載は聲も無く臭も無きとは天主を稱する者まして試みよ其形体を論ぜん乎之を見れども見へず之を聽ども聞へず詩に云く神之格る格べからずとは其此の謂歟故に君子は其睹ざる所に戒慎し其聞ざる處に恐懼すと詩に云く汝の室に在を見に尚屋漏に愧ずと若一個無形無像全知全能の天主あくんば則君子戒慎する所の者是誰れぞや恐懼する所の者是誰れぞや再び理に據て推せば則天主有るを知るべし人未だ自家の先代祖宗を觀見せざるが如きも豈敢て先代祖宗あきを說んや哲人君子は其末を見て其本を知り其固より然るを視て其然る所以を知る譬へば一房屋を見るが如し則先づ匠人有て以て之を作るを知る烟を見れば則火あるを知る光を見れば則太陽あるを

知る國政法律を見れば則一君王有て以て之を定むるを知る所以に一たび天地萬物を見れば則一天主有て之を造るを知る祖宗あくんば子孫何に從て來らんや工匠無んば房屋焉ぞ能く自ら成らんや火あくんば必煙あし太陽あくんば必光なし君王あくんば國政法度あることあし夫れ一全能の天主あくんば萬物誰よりて造らるゝ歟若し親見せば則信ず可く見ざれば則信ぜずと說かば此乃愚人の意哲人君子は則否らず只理を以て之を推し理あければ則信ぜず理あれば則信ず今一例を擧ぐるに上古堯舜の二帝あり今一人も見る事を得るあし哲人は則ち史の記載を以て証とあし又理を以て之を推さば必ず此二帝あるを信ず設ひ信せざるものありと雖ども他人必ず之を責て陋愚とあす

今一天主あるを說けば知者は則聖經を以て証とあし又理を以て之を測れば必ず一天主在るを信ず若否らざれば則愚夫の見なるのみ

何爲ぞ儒に從へば足らず必ず該に天主の敎に從ふべきを論ず

客曰此の講論に從へば天主敎は實に眞正の敎たるを知るべし但我等の儒敎も亦稱して正敎と謂べし何爲ぞ儒敎に從へば足らず必ず該に天主敎を奉ずべしと謂ふ乎

曰此の理を明にするを要せば先づ當に儒の字の義を知るべし儒とは學者の稱にして通達及び分別の義なり能く學を好み古今に通達し邪正を分別するを謂ふ夏商周三代の大賢猶り上帝眞主を崇奉し淫祀を事とせず實に眞儒と云へし周之衰ふる也百家競興り其道大に壞る此時に當りて孟子劬々として之を擧ぐ其後亂亡相繼ぎ遂に趙宋に到り儒流一變し是に於て性理之學起り殆ど上古の眞儒に背く譬へば猶佛氏の法の如く其當時に當てや怪誕不經今日の如くあらざるべし而して古の眞儒流と今儒と大に牴牾する者辨論を措ず眞儒の上帝に奉事するや其欽崇の嚴之を六經に徵して知るべし而して今日の儒の大極を上帝とする の說の如きに非ず其口實古今の書を誦すと雖も其行ひは古賢の道に從はず妄りに邪說を信じ妄りに左道に從ひ良心を埋沒し或は老佛に混じ以て福祿を求め以て名利を求め眞假を審にせず淸濁を分たず同流合汚齋を建て醉生夢死して省せず査せず此の如き人を稱して儒敎と謂ふ實に

古哲賢帝の儒教を玷辱するなり我等奉教人い然らず惟眞の天主を敬し異端を闢き邪説を拒ぎ淫辭を斥け假を捨て眞を求め獨り正道を行ふ却て實に眞の儒と云べきなり

何爲ぞ孔子を敬せざるを論ず

客曰爾等奉教人にして又孔子の書を讀し者也而して其孔子を捨て敬せざるい何ぞや

曰我今二端を擧て之を論ぜん夫れ天主は唯一の至尊にして万物を造成し以て之を主宰するの大眞主あるが故に我等只天主を敬すべし抑孔子を敬する人い則大眞主なる天主を捨て天主造成の者を敬するなり亦理に戻らずや蓋し孔子い人間にして耳目口鼻を備へ更に吾等と殊あらざる者也天主を捨て之を敬する豈至愚と謂いざるべけんや集説詮眞に孔子の事實を記し之を辨じて曰孔子の事實編年を歴觀するに周の靈王廿一年に生れ敬王四十一年に卒す向に年を加て易を學び大過無らしめんと欲して未だ願を遂ずと雖も而して過を補ふ日に新にして老に至て彌篤し接ずるに其官を郯子に問ひ琴を師襄に學び禮を老聃に問ひ樂を萇弘に訪ふ則其學を好で厭いず下問を恥ず道を求るの念孜々として已む靡し亦接ずるに其學を闕里に教へ禮を檀下に講ず則其上に語り下に語り人を誨へて倦ず人と善を爲すの心又何ぞ深切あるや且也政を魯に爲し侏儒を斬り少正を誅し國由て大に治まる而して素王の稱良に以へある也詩書を刪り禮樂を定め春秋を作る之を以て訓を後世に垂る而して其文德著る孔子周の世に生れ當時固に

類を出て萃より拔く與より比隆する莫し豈東魯の儒生爲らんや然りと雖も孔子縱ひ人に起異するも究に亦生あり死あるの人より外ならず上主造る所の人より外あらざる也且其常人より異ある所以の者は均しく上主の賦與に屬する者あり故に孔子亦其自る所を忘れず嘗て曰天德を予より生ずと則孔子を敬する者は先尙孔子の自て造る所の上主を敬すれば其可あるより庶からん

今此說孔子の人と爲を辨じ且敬拜すべからざるの義を陳ず嗚呼亦何贅せん哉

孔子の敎を論ず

客曰孔子の言甚だ善し之を守れば天主敎と異あるあからん

曰然り孔子の言美ありと雖も未だ美を盡さいる處あり今一を擧て曰はん孔子罕より天命を曰ふ者は蓋し其經也然べ則孔子は天主を知ざる乎蓋し孔子天主を知ざるより非ず曰く天を欺かん乎曰く丘の濟らざるは命也曰く天の將より斯文を亡さんとする後死者斯文より與かるを得ず曰く五十にして天命を知曰天我を亡せり曰亡之命なる哉曰罪を天より得る禱る所あし曰天命を畏る曰天何を謂ん哉曰天之を絕ん曰公伯僚其命を如何ん曰道の將さに廢せんとする命なり焉ぞ孔子天主を知ずとするを得ん然るより其知ざる處を欠て虔で命を曰ふ者は則ち孔子の孔子たる所あり渾て後世の學者の如く妄より附會穿鑿をせずして却て古文を傳へたるは眞より美とする所あり而して其語を欠く處は未だ足ら

ざる處也然らば其足らざる者よ依らんよりハ寧ろ全きの道よ就よ如んや況や天主教を遵守すれば万善盡く其中よ在るを乎

何爲ず祖宗を敬せざるを論ず

客曰此の如く辯じ來る知る可し天主ハ乃乾坤の大主理當よ之を敬す可し然るよ我等の祖宗乃身を生むの父母亦之を忘る可からず曾參曰く終りを慎しみ遠きを追へば民の德厚きよ歸す爾等教を奉ずるの人祖宗を敬せざるハ何ぞや

曰此の問ひよ答るを要せば先づ當よ祖宗二字の義を解す可し祖ハ源なり宗ハ根なり人類の根本之を祖宗と謂ふ我を生む者ハ父母なり父母を生む者ハ曾祖なり曾祖を生む者ハ高祖父なり高祖父なり此よ依て推せば開闢の始祖よ至て止む我等の始祖を生む者は天主なり天主は人類の根本たり祖宗の祖宗たり所以よ天主を敬する者は實よ乃ち祖宗を敬するなり天主を敬せざる者は乃ち是れ祖を棄て宗を滅するなり吾等奉教人なるが故よ天主を敬し且其天主の代理たる親に孝道を盡せり孝とは何んぞや族類を愛育保助して之をして安きよ就かしむるの義是皆天主聖教の吩咐下令よ係る夫れ親なる者は受造の物なり能造の眞主を捨て受造の物を敬するハ豈これ理ならんや

死屍を拜せざるを論ず

客曰此の前論を考れば奉教人ハ祖牌を供せず實よ正理と

謂べし然るよ父母裝殮棺よ入るに當りてや子孫亦傍よ在り叩拜して以て哀痛の情を顯すべし但你等奉教の人は然らず父母死後裝して棺内よ入るれども孝子孝孫俱よ叩拜せざるゝ何ぞや

曰今一々其疑ひを解かん夫れ人一度死して後今生の罪報を償ふが爲め多少の苦惱を受くる時吾儕とれらの人々よ孝道を盡さんと欲すれば天主よ懇祈し之が苦惱を拔き救ふを得るなり實にこれ祖先を敬ひ族類を保助するの道なりき且奉教人も亦棺槨を裝飾して葬埋の式を行ふよ二端あり一よゝ天堂よ上昇するべき靈魂が之よ包含せしを以てあり二よゝ華麗鄭重の祭式を以て天主を祈り其靈魂を救助する所以あり靈魂すら敬拜すべからず況んや脫去の

糞土を乎

天堂地獄を論ず

客曰你等天堂有るを信ず乃萬福を以て善人を賞する所地獄有るを信ず乃萬福を以て惡人を罰する所但六經の内明よ此の事を言はず你等之れを信ずるゝ何の故ぞ

曰今你古賢の書を讀めども細よ其文義を考察せずして說を就す者あり古賢明かよ天堂地獄の事を言わずや何ぞ觀ざる大雅よ曰文王上よ在て於天よ昭かなり又曰文王陟降して帝の左右よ在り又曰世よ哲王あり三后天よ在り駐よ解して三后者即ち大王王季文王あり又召誥に曰ふ天既よ大拜殷之命を遐ざけ終ふ玆れ既よ先哲王多くして天よ在りと又古書よ言ふ上よ在り天に在り帝の左右よ在りと是

れ天堂を言ふあらずや上主宰より萬福を享受する所よして本名の名づく可き無故よ只天堂の二字を以て之を稱し以て安樂の意を表する也此よ依て見る可し古賢皆天堂有て善人の賞を受る所の處を知る由て之を推せば又地獄ハ惡人の罰を受るの所の處たるを知るべし蓋し賞あれば必ず罰あるハ自然の理あり古書内文王武王を稱して有道の正君と爲し桀王紂王を謂て乃ち無道の昏君と爲す正君天堂よあれば昏君も亦天堂よありと道ひ難し必ず地獄よあるや疑を容れざる也地獄ハ乃ち是れ惡人の靈魂魔鬼と同く天主の義怒公罰を受るの處本と名の名づく可きなし故よ地獄の二字を借て以て罰を受るの意を表するあり若し夫れ天堂地獄無んば何を以てか善人を賞し何を以てか惡人を罰するを得んや倩人世の現況を察するよ凡そ罪惡瀰漫不善として行ハざる無者も其一生を誤らず金花銀兩を山積して無事よ樂死するあり而して仁善温慈些少の不良と雖も必ず退避する人も困乏艱難よ陷り惡人の爲めよ呵責を受け生涯其下風よ佇立するあり亦善人たる亦此くの如くあらば抑其賞罰を司り善惡を判する所なしと謂ふべし是故よ天堂地獄あるあしと言ハ善も惡も區分するよ由あく茫昧無覺よ歸し惡を犯して己を利し人を損ひし者ハ應分の幸とこそ謂ふべき也

客曰善を行へハ人之を讃美し其德を公稱するが故よ其善四方よ聞達して誰あつても知らざるなきに至る是則賞あり惡を行へハ人之を忌避し其醜名を唱ふるが故よ則之を

以て適當なる現罰と謂ふべきのみ

曰看よ世間に在て好を施し不善を行ひ寶貨を擁し權勢を有する者最も多し人止むを得ずして之を讃美する亦多しとれ其權を有し寶貨を擁するによつて也然るに善人よゝ貧困微賤の者多く他人より侮辱を受けて一生を了するあり實に世上の貧富榮辱ゝ風標の風に順ひて方向を殊にする如く逐日廻轉して更に定所あるなし之によりて之を推ゞ世間に於て善惡の賞罰あることと決してなき也

客曰善を行へゞ其心甚平易惡を犯せゞ其心甚苦惱す是則賞罰ある所以なり

曰凡そ人惡を犯すに當りてや其初め一度之を犯せし時心に安んぜずして暫時其非を痛めども其念忽ち散じて再び

之を犯し三たび之を犯し十犯三十犯に至りて惡念熾盛凝結漆膠固有の如く遂に之に安んじて漫然として省みず所謂先入師となりて救藥すべからざるあり此に至て初發の一念些微だも萌さゝるが故に其不良を責るに由なく其罪彌大にして其罰彌尠し又善事を行ふも之と異なることなく初め之を行へゞ其心甚だ喜悅に耐へざれども屢之を爲せゞ終に慣習の陋念を生じ少しも喜悅の事あるを覺ず察すべし其善彌積で其賞彌尠し是に由て之を觀れゞ心中の勞苦心中の悅樂も之を以て至當なる賞罰と謂ふを得ざるなり

魂に三等あるを論ず

客曰此に依て推ゞ身後必ず賞罰あり但世人皆て曰く人死

して魂散ず若し肉身一たび死せば靈魂則散ず天堂地獄あり
と雖ども焉ぞ能く賞罰を受くべけんや
曰此れ愚民の言明人君子い必ず敢て此を言いず亦敢て此
れを信ぜず此の理を明にせんと要せば先づ當よ魂に三等
あるを知る可し曰く下等を生魂となし中等を覺魂となし
上等を靈魂とあす生魂い即草木の魂也水土の濕氣よ由り
て能く草木を扶けて生長し花を開き菓を結ばしむ但知覺
運動あし水土の濕氣一たび乾けば草木即ち枯れ生魂則ち
散ず覺魂い乃ち鳥獸魚蟲の魂也本身の血氣よ由り獨り能
く鳥獸魚蟲を扶けて生長するのみならず且つ能く其をし
て知覺運動あらしむ又其害を見而して避くるを知らしめ
饑渴して飲食を求めしめ匹配して本類を傳へしむ但仁義

禮智の道理を推論する能いず若し本身一たび損害を受く
れば血氣一よ散じ覺魂即滅す靈魂い乃吾人の魂よして母
胎よ在る時天主より賦する所形體よ賴らずして生き亦形
體よ隨て滅せず乃ち有始無終の魂なり明悟愛慾配合の三
司ありて獨り生覺の能あるのみならず且つ能く道理を推
論し是非を分別し可否を判斷するや禽獸の魂と大別あり
禽獸い只本情よ隨て配して生を傳へ饑て食を求るを知り
別よ貪る所あし人い乃大に相同じからず貧よして富を求
め富で貴きを求む富四海を保ち貴き萬人よ超るといへど
も其心尚滿足せず百年よ滿たずと雖ども然れども常よ千
歳の憂を懷く此れ乃ち永遠不滅の証也若し人死して魂則
ち散滅すと說かば何ぞ必ず仁義道德を行いんや又何ぞ必

ず孝悌忠信を修めんや若し善を行ふハ名聲を圖るが爲也と說かバ然バ我身死して土よ皈し變じて灰泥とありあバ美名醜名も我に於て何ぞ干渉あらんや何ぞ損益あらんや此よ從て見る可し文武仁義芳を百世よ流すと雖ども此れ亦無益あり桀紂の暴淫臭を萬年よ遺すも亦害とするところ無し只この身死して魂散ずるの一句話を以て大よ小人僥倖の門を開き惡黨自寛の心を啓く實よ乃ち萬惡萬禍の根源あり又人の本性皆あ快樂を愛す若し美名を要せバ必ず該よ德を修め功を立て必ず該よ己れよ克ち禮よ復るべし倘し死する後靈魂賞報を受けずんバ誰れか肯て百年の勞苦を用ひて十年の虛名を圖るを爲ん所以よ此の話を說く者ハ必ず是れ忌諱なきの小人よして古昔明賢の言を譏らざるあり大雅よ曰文王上よ在り帝の左右よ在り三后天よ在と若し身死して魂散ずと言ハバ此書何の解說を作すや若し身後賞報なくんバ曾參の每日三省顏淵の簞食瓢飲君子終日乾々として道を謀て食を謀らず道を憂て貧を憂へずと雖ども則何の益かあらん又世俗の常言を聞かずや人死して虎狼の如し虎狼猛しと雖ども一死の後ち人皆怕れず又其肉を食て其皮よ寢ぬ人死せバ則然らず是至親好友と雖ども其屍骸を懼れざるハあし此れ則身死魂存するの理を明徵する也

神人鬼三樣を論ず

客曰你の前言よ據れバ人の靈魂禽獸と大よ分別あるを知るべし身死すると雖ども其魂滅せず但世人皆て言ふ人死

して鬼と爲り鬼亦變じて人となる可しと眞あるや否やを知らず

曰你魂鬼兩樣の事を問ふ我れ今神鬼人三端の情を辯明せん世人多く此三端を明よせずして之を混亂するあり你今此を問ふが故よ予也辯ぜざるを得ず抑も神鬼二つの者皆無形無像始めあり終りなきの體天主天地万物を造るの時未だ人類を造らざるに先だち無數の天使あり位九品よ分つ其體色もなく像もなく明悟記含愛慾の三司あり常よ天主の左右よありて令を奉じ旨を承くる朝廷百官の如く一樣其中よ一個の才能最も大なる者あり路濟拂爾と名づく自ら其能力其高位を恃み遂に傲心を生じ天主の位を爭へんと欲し當時衆天使の中三分の一路濟拂爾よ隨從して天主よ背くあり天主當時此一黨の傲使を罰して獄に下し永く無窮の苦を受けしむ即ち今稱する所の魔鬼なる者是也其餘の二分の善使常よ天主の左右よ在て永く天堂の眞福を享く今稱する所の天使なる者是あり天主傲使を罰するの後方に吾人類の元祖二人を造り男を亞當と名づけ女を厄娃と名づけ黃土を用て肉身を造成し一靈魂を賦し彼を世よ在りて虔心主よ事へ德を修め功を立て死後靈魂天堂に到り以て叛使の位を補ひ永く無窮の眞福を得せしむ即ち今稱する所の靈魂是なり若し世よ在りて主に背き魔に事へ兇を行ひ惡を作さゞ死後靈魂必ず地獄に下り魔鬼と同く無盡の苦を領受す此れ神鬼人の三つの者の來歷也妄言以て之を混亂す可からず

何爲ぞ天主は魔鬼を准して世に出しめ人を害せしむるを論ず

客曰魔鬼既に地獄より下り必ず世上に反る能はず然るに今世嘗て邪法の人を見るに怪異の事を行ふ若し魔鬼世に出て相助くるに非ずんば單人の本力萬々之を爲す能はず見る可し邪魔仍能く便に隨ひ世に出て以人を騙らかすを何爲ぞ天主は之を禁ぜざるや

曰時ありて天主魔鬼の世上に出るを准し以て惡人の罪を形僇し以て善人の功を試練せり故に時として邪法の人或は邪像菩薩靈を顯し異を顯せ共これ邪法人及び菩薩の能力によるに非ず乃ち魔鬼其體に附着して之を爲し人をして是を尊て主と爲し之を信じ之を拜せしめ身後彼と偕に

同く地獄の苦を受けしむ

魔鬼人を害するの故を論ず

客曰魔鬼人を陷入して同く地獄の苦を受けしむこれ何の故ぞ曰我先己に明説せり魔鬼原本是れ天使なり但驕傲の罪に因て天主の罰を招き天堂の永福を失ひて地獄の永苦を得天下萬民を見るに乃天主の兒女又吾人世に在りて主を敬し德を修め功を立つれば身後必ず天堂の永福を得るを知る此が爲めに上み天主を恨み下も世人を妬み天主を害するを想ふ然れども萬々能わず只天主の兒女を害するを得故に千萬百計邪法人の身に附き菩薩の體に合し名を冒し簪を頂き怪を作し奇を弄し人を誘き主に背き己に向へ同じく地獄の永苦に誘導陷入す故に凡そ邪神を敬する

の人天主の子と謂可からず乃ち魔鬼の奴なり

客曰天主魔鬼を許して人を永苦に陷るを論ず

何爲ぞ天主ハ魔を許して人を永苦に害ふハ何の故ぞや

曰天主魔鬼の世に出るを許すハ爲め二ハ善者の功を増が爲め三ハ惡者の罪を罰するが爲めあり當に知る可し天主人に賜ふ明知の法あり乃ち自主の權あり能善惡を分ち能く邪正を別ち自ら能く取舍し或ハ善を爲し或ハ惡を爲す皆な己より主張す魔鬼能人を誘て惡を行ハしむと雖ども强て人をして罪を犯さしむる能ハず故に魔鬼の誘に順ふ者ハ邪に從ふの罪あり魔誘に從ハざる者ハ邪に克つの功あり兵將の仇に勝つ者ハ賞あり仇に順ふ者ハ罰あるが如し吾人則天主の兵將にして一生

世に在て乃ち敵と戰ひ若し魔誘に勝て而も主誡を守り死に至れ共變せざれバ必ず天堂永福の報を得魔誘に順て而も天主に背き死に至れども改めずんバ必ず地獄永苦の罰を受又知る可し天主ハ至公至義にして更に偏頗あることあし我等絲毫の善惡あれバ將に必ず賞罰の報答を受くるハ必然の義あり

天主の公義何くに在るを論ず

客曰天主既に是れ至公至義善あれバ必賞し惡あれバ必罰すと何爲れぞ當て世上の善人身を終るまで苦を受け惡人身終るまで樂を享是の如き顚倒錯亂は君子疑惑を增し小人好心を甘す果して天主の公義ハ何くに在るや曰善を爲せバ賞を得惡を爲せバ罰を得此れ乃ち自然の理必ず疑ふ

べからざるあり書に曰廻よ惠へば吉逆よ從へば凶惟れ影響と蔡沈之を解して曰善よ從ふ者ハ吉惡よ從ふ者ハ凶猶影の形に從ふが如く響の聲よ隨ふが如し又曰天道ハ善よ福し淫よ禍す善を作せば之よ百殃を降すと此れ則ち善を賞し惡を罰するの理よして永く改る能はざるあり然して當よ天主祥を降し殃を降すべし必ず死後を待ち其公義を用て盡く之を賞罰す又人の眞善眞惡今世誰れか能く明よ認めて是れを斷定せん人の思言行爲全く天主の聖意に合ひ、天主の誡命を犯さゞる如き方に之を眞善と爲す倘し些微不順の欠缺あれば眞善たるを得ず蓋し善を作す全きを要し不善を作す只一惡を要す今世全善欠る無きの人

ある可けんや多々の事情を以て我等見て善事と爲す所恐らくハ天主反て視て惡事と爲すを我等只人の外貌を視るのみにして其心思を識る能はず天主は則然らず但人の外貌を見るのみあらず且其心思を知る又今世の人大罪極惡なる者と雖ども必ず些微の小善あり該よ小報を受く可し世上の榮華富貴は算するよ眞福あるを得ずこれ久しく享る能はざるよ因る也享ると雖ども百年に至り身一たび死すれば完く了る天主暫世の小福を用て惡人の小善を報じ身後地獄の永苦を以て惡人の重罪を罰せり是れ天主の公義あらずや又今世の人至善至良ある者亦必ず些微の小過あり當よ小罰を受べし今世の患は貧賤と雖ども重罰よ非ず因て久しく受る能はず受て百年よ至ると雖ども身一た

び死すれば則ち完く了る故に孟子云憂患に生て安樂に死すと愚人賞罰の公義を明にせず禍福の眞假を知らず妄りに天主の不公を怨む豈眞に天主の不公あらんや何ぞ知ざる玉琢かざれば器とならず鉄磨かざれば銹を去ず功に勞あければ立つ能はず盛德に若あければ修る能はず功あく德あくして天堂の福樂を求むるに猶文武を講究せずして妄に功名を貪るが如し豈理あらんや

何爲ぞ天主惡人を罰して爲めに善人の仇を報せざるを論ず

客曰惡人世に在て常に善人を害す若し天主至公ならば何爲ぞ盡く是を罰して善人の仇を報ぜざるや

曰天主是れ至公至義なりと雖ども但又至仁至慈公義に罰

を要し仁慈に救を要す今世に乃ち天主仁慈を施すの時也身後に乃ち天主公義を用ひるの秋あり天主今世仁慈を以て人を過し其過を改め善に遷るを望み而して其靈魂を救ふ倘し惡人惡に固執し死に至て改めずんば天主將に其公義を以て之を罰す又惡人善人の爲めに害ありと雖ども然れども善人の爲めに稗益あり曰惡人の殘害誹謗あくんば善人何を以て忍耐の德を修め寛惠の功を立てん反人の姦邪あくんば何を以て正人の忠良を顯さん桀紂の暴虐あくんば何を以て湯武の仁愛を顯にさん小人の鄙見あくんば何を以て君子の高志を顯さん若し天主立ところに盡く惡人を罰せば善人の爲に大害あり因て多く父暴に子戾あるあり若し立ところに其父を罰せば子孤獨の苦を受けざら

んや多く妻賢に夫不肖あるあり若し立どころに其夫を罰せば妻寡獨の憂を受けざらんや又世間至重の罰は一死に過ぎざるのみ一人を殺す者は必ず一死を以て其命を抵すべし萬人を殺す者は焉ぞ能く萬死を受て以て萬人の命を抵さんや故に至仁の主暫く且之を存し之を養ひ之を容し之を誨へ其過を改め善に遷るを望む此に於て死に至て改めずんば仁慈乃ち盡きて公義乃ち行はる此れ天主仁義兩全に充て飽るなきを顯すに足るあり

何爲れぞ天主人に財を均分せざるを論ず

客曰天主至公至義あらば何ぞ世上の財帛を將て人に均く分たざる貧富の別あく彼我をして均く得せしむれば豈美あらざらんや

曰天主人を生ずるに貧あり富あるは貧富の德に報ずるを要するなり富人主の爲に施濟すれば報あり貧人主の爲に忍苦せば報あり又世人生命を安度するを要せば士農工商あるべし若し世人皆な富まば誰か工匠を爲さん誰れか肯て耕種せん耕種あくんば富人何を以て生命を保たん倘し衆人皆貧あれば則ち窮人力を用るの處なし何を依賴して生命を養ふことあらんや貴賤を論ずるも亦然若し世人俱に卿相あらば誰か子民たるや故に孟子曰く君子心を勞し小人力を勞すと二つの者皆缺く可からず

何爲ぞ天主教を稱して聖教と爲すを論ず

客曰く我れ奉教書内を觀るに皆天主教を稱して聖教と爲す知らず何を以て聖と爲すや

曰く道理眞實憑あり據あり規誡禮儀正大光明能人をして己れを克ち禮を復らしむ又人をして當さを知る可き所の事を知らしむ即ち人始末を知れば生は何くより來る現生當さに何事を爲す可き身後當を何くの處を歸すべきと此三端を知れば當さを能く善を行ひ惡を去り德を修め功を立て聖を成し賢を成し死後能く天堂の永福を得死後能く地獄の永苦を免る故を稱して聖教と云

聖教理證卷之二

奉教人何の誡を守るを論ず

客曰奉教人の守る所何の誡ぞ

曰く天主十誡なり一は一天主を萬有の上を欽崇す即ち我等時々處々當を小心翼々として是を敬し各般の邪妄異端俱に之を棄絶す可し二は天主の聖名を呼て虛誓を發する勿れ即ち天主の聖名を用て以て虛呪を發し仮の誓言を述べ以て他人を騙かす可からず三は瞻禮主日を守れ即ち七日の内一日當を誠心を以て國泰を民安く保祐するを主を祈る可し並を父母親友の靈魂肉身の事を至るまで俱を當を求むべし四は父母を孝敬せよ即帝王官長俱を當に是を敬す可し五は人を殺す毋れ凡そ忿恨詈罵毒藥刀棍を以

て各般人を傷ふ事まで倶に爲す可からず六は邪淫を行ふ毋れ即人の妻女を犯し或は本身を穢す等のと倶に行ふ可からず七は偷盗する毋れ即ち凡そ人の財物を傷ひ以て各般の不公平の事に及ぶまで倶に當さに之を誡む可し八は妄證する毋れ即ち人の名聲を毀り並に妄証訟頼妄告讒言等の情倶に當さに之を絶す可し九は他人の妻を慕ふ毋れ六誡に淫事を禁止し此の誡に淫念を禁止す十は他人の財物を貪る毋れ七誡に偷盗を禁止し此の誡に貪心を禁止す以上十誡列して兩端と爲す前三誡は皆天主を恭敬する の事後七誡は皆人を愛する己れの如するの道也即ち己れの欲せざる所人に施すなかれ凡そ主の命に順て此の誡を遵守する者は則善人と謂ふべく身後天堂の報を得るあり

凡そ主の命に背逆して此の誡を犯す者は乃ち惡人と云ふべし身後必ず地獄の罰を受る者なり

誡を守るの人少きを論ず

客曰聖教十誡皆良心の理絜矩の道に係る細に奉教人中を査するに守る者少く守らざる者多し亦爲ざる所あき者あり又奉教中の人我が教外の人に比するに更に醜更に惡ある者あり若し此等を稱して聖教の人とあさば則ち天下皆稱して聖と爲す可し

曰今我等只教の邪正道理の眞假を論じて人の善否を論ぜず豈奉教者の不良に因りて即ち安りに教の不善を議す可けんや國法に不善あし能人をして惡を避け德を修めしめ以て天下太平を致さしむ然れども遵ふ者多しと雖ども守

らざる者亦少からず又五刑を以て凶惡を懲す有るハ善民をして生命を安度するを得せしむるあり然れども亦多人國法を藐視するあり五刑を懼れず奸盜詐僞大を以て小を壓し衆を以て寡を欺き强を以て弱を凌ぎ全く忌憚することなし此を耻ることなき徒有るヨ因りて你豈敢へて國法の不善を云はんや五刑嚴あらざるを說かんや我聖敎人を訓ゆるヨ刑罰を用ひず原と是れ之を導くヨ德を以て之れを齊するヨ禮を以てす若し規矩を遵守せざる者あれバ必ず眞敎の人たるを得ず僅ヨ奉敎の名を存するのみ然るヨ冒名の徒の爲めヨ你豈敢て聖敎の名を責めんや你各州府縣の監牢内ヨ到り之を查し細かヨ日ヨ五刑を受る

の人を看ヨ其中吾奉敎人ある可きや否や又將た之ヨ問へ何の故を爲て監牢五刑の苦を受ると必ず答て曰はん或ハ盜案の爲め或ハ奸情の爲め或ハ命案の爲め等の情或ハ奉敎人の監ヨ居り刑を受くる者あるも此等の爲めの案情あると少しこれ人の枉告を受け或ハ他人の拉扯連累の故に因るヨ過ぎず又看ヨ大街口岸鎭市の間に無數娼妓の婦あり細々ヨ之を訪へ吾奉敎の婦女ある可きや否や訪ふて千百ヨ至ると雖ども必ず吾奉敎の婦あると少し之ヨ依て此を觀れバ你我等奉敎人外敎人ヨ比せバ更ヨ醜と說かバ豈大ヨ錯らざらんや

外國の敎と雖ども當ヨ從ふ可きを論ず

客曰く道理眞なりと雖ども然も是外國の敎必之ヨ從はざるべし

曰く夫上帝の名を以て來らんゝ普天下の聖教也名教也假令何れの國より傳はるも外國の教として分別するを得んや汝等上帝ありと知らゞ其教を受ざるゝ何ぞや金ゝ地を擇まず是精を寶とす道ゝ方よ拘らず惟れ眞當に從ふ可し眞ゝ則ち普世萬民の道也孔孟鄒魯よ生るれども豈道を齊晉よ傳へずと云んや若し我等の本州饑荒あれゞ外國の米糧を運采す豈寧死して而かも食はざらんや洋貨鐘表丁香白蔻洋參等の物皆外國より來る你豈是れ外國の物と說て而かも用ひざる可きや又釋迦牟尼は印度の產也我主ゝ如德亞の產也齊しく亞細亞よ出たり然よ一ゝ今說く如く正教一ゝ皆人倫を欠き俗を敗るの毒よ係る你皆從て之を敬す我等聖教の道根あり源あり句々眞實能人をして生時よ聖とあり死後よ福を得せしむ你反て視て問務として之を棄つ豈毒藥當さよ喫ふ可くして良藥反て之を吐くべけんや

異端を論ず

客曰く此よ由て講じ來れゞ理當に天主を恭敬すべし然るよ世俗通じ行ふ所の事神字を貼し或ゝ日を擇び期を擇び命を算し面を相し卦を占し籤を求る等の如き之を用るも亦碍り無し你等一概よ之を棄てゝ用ざるゝ何の故ぞ

曰く邪正並び行ふべからず楊墨の道を棄てずして焉ぞ能孔孟の道を行んや黑能白を混ずれども白黑よ雜はる可からず若し些微の黑を沾ずれゞ純白とあらず邪能正を容るれども正能邪を入れず凡そ道根源あり實據あれゞ即正道たり凡そ理根據あけれゞ必是荒唐あり今將さよ倆問ふ所

幾條の異端を一々左方より辯明すれば便ち其可否を知る可し

神佛の札守を論ずるの一

天主は唯一の大主にして天主よく吾人を守護し玉へり嗚呼世の惑溺者大主を認得ずして即ち神佛を以て己れを助くる者とし各之に請願して其名札及び其眞言陀羅尼と名づくる者を以て之を門戸に貼し胸に掛け臂に佩び護身符とおし之れが守護を請ふ是實に無益のことを行ひて天主を辱しむる者と謂ふべし

日を擇ぶを論ずるの二

日を擇ぶの妄を闢くを要す只看よ武王甲子の日を以て興り紂王甲子の日を以て亡ぶ二王同日交ども戰ひ勝あり敗あり兵事此の如し別事亦然り譬へば同日塲を張り同日婚娶するの如き其効驗を査するに多く同じからざるあり亦一時の間普世の人生まるゝ者無數死する者無算あり時候同じと雖ども彼の爲めに稱して生時と爲す可く此が爲めに稱して死時と爲す可し此に由て知る可し日子時候並に吉凶の別無し唯我等善を行ふに就て稱して吉日と謂ふ可く惡を行ふに就て稱して凶日と謂ふ可し故に曰禍福己れより之れを求めざる者無し日子と何ぞ關からんや

命を算するを論ずるの三

命を算するの妄を論ず之を史鑑に査するに軒轅黃帝ある者あり大橈に命じて子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥の十二字を用ひて十二支と爲し亦甲乙丙丁戊巳庚辛壬癸十個の字

を用ひて天干と爲し又合せて六十花甲と成し以て歳時を分ち以て年月を記す並に別意あし後戰國の時に至り鬼谷子ある者あり金木水火土の五字を加添し安りに相生相尅を談じ人道天理を推測して愚民を哄す實に經僞の甚しきこゝに極るといふべし一時の間生育する無數焉ぞ能く貧賤賤壽天も同一あるを得んや帝王卿相生るゝの時も亦多人同じく生るゝあり豈に但帝王卿相たらんや雙胎の兒同時に生るゝを見る然して後又貧富壽夭齊しからざる有るは何や算命者全く妄りに人の終身の事を議定す然ども皆て其卦占を以て終身の異なる有るを見る古書に只說く易きに居て以て命を俟つ未だ易きに居て以て命を算するを說かず又生死富貴天に有るを說く未だ之を卦占にあるを說か

ず當に知る可し生死富貴壽夭皆天主之れを安排す我等人類焉ぞ能く天主の意を推し測らんや命を算する者を見る多は是瞎子你ぢ眼あるの人にして今日尙明日の事を知らず眼なきの人尙天地萬物を見る能はず豈能く你ぢの終身の事を知らんや又眼あるの人路を行くに必ず瞎子の路程指引を求めず若し否らざれば則狂人たるなり此故に人に命算を請ふに獨り銀錢を費すのみならず且哲人君子の耻笑を惹くのみ

相面を論ずるの四

相面の妄を論ず人の筋骨皮毛百肢五臟六腑は帝王より以て庶人に至まで皆同じ然して些の分別あり眸瘦黑白に過ぎざるのみ亦先きに瘦せて後に肥かなる者あり先きに肥

かゝして後に瘦する者あり又美貌の人偶ま疾病瘡痕を得て變じて貌醜とある者あり又飲食起居水土勞逸ハ能人の像貌を變ず窮する者ハ日夜菜羹山野ゝ暴露し富む者ハ珍饈常ゝ重屋ゝ居る自然氣象同からざるあり此くの如き其の像を觀て只當時の窮富或ハ勞或ハ逸或ハ壯或は弱を驗す可し焉ぞ世上寶トの徒妄りゝ其後來富貴賤と子あると子無きとを知るを得んや嘗て先きゝ窮して後ゝ富む者あり先きに富で後ゝ窮する者あり豈像貌先後の同からざる有らんや亦相貌の相似て效驗同じからざるあり古文記ゝ舜王重瞳あり而して項羽も亦重瞳あり何爲ぞ一ハ仁ゝし一ハ暴あるや又陽虎の形貌孔子ゝ似るあり若し人の聰敏愚蠢性情剛柔を論せゞ我等其外貌を見其擧止行爲言語

動靜を查し略幾分を議り得るが如し醫生の如き者病人の外形を看亦其病の輕重を知る可きのみ但普通の術士ある者人の長短寬窄眉毛耳髮の高低を見て其終身の吉凶禍福を審ゝするとハ此れ獨り無稽の謊談を爲すのみ

占卦求籤等を論ずるの五

占卦求籤の誤りを論ず求籤ハ闔を拈り殿を擲つと異なるゝし應ずる者少なく應ぜざる者多し嘗て吉を占ふて凶を得凶を占ふて吉を得るを見るハ何ぞや偶然應ずる者あれゝ就て卦籤ハ靈有と說く應せざる者あれゝ就て置て言ハず何ぞ想ハざるの甚しき占卦百次すれゝ必ず幾次應ずる者有比へゝ未嘗て武を習ずして弓を彎き箭を射るが如き早より晩ゝ至れゝ必ず幾次か鵠ゝ中るあり其武藝の精熟

あるに非ず是れ撞着するよ過ぎざるのみ術士屬災祥禍福を說ども妖ハ德よ勝ず見ずや桑売一夜よ生じて武丁德を修て妖桑枯死するの類多々也是よ依て是を見バ妄ヨト筮するとも亦定命あるよ非ず

神祇菩薩を論ず

客曰天主聖教の理當よ信服す可し我國よ於て敬する所の神祇菩薩皆是前朝帝王の封ずる所よして名目多して指を屈し難し其中よ豈一二の眞神なからんや汝等一概よ之を棄て敬せざるハ何ぞや

曰世俗敬する所の鬼神ハ千奇万怪名目最とも多し各方各神何ぞ能く言盡さんや總て之れを論ずるよ兩種よ過ぎず一ハ生成の物を指して神とな

し一ハ死過の人を指して神とおす生成の物を指して神とおす者ハ天地日月星辰を敬するよ過ぎず是らハ未だ天地日月星辰の來歷を知らず之を稱して神と爲す者也當さよ天地本來一主宰あるを知るべし乃ち萬有の大父母あり未だ人を造らざるの先きよ天地を造りて人を覆載し萬物を造りて人を養育し日月星辰を造りて人を光照すること猶父母の預め房屋産業衣食燈光を備て兒女を保養するが如し若し父母を棄てゝ敬せず只房屋器皿を恭敬せゞ其理以て如何とおす吾奉敬の人ハ然らず一至尊無對の天主あるとを知て之を拜禮す日毎に萬物を造りて恩惠を施す者吾人安ぞ之を敬し之を謝せざる可けんや死過の人を指して主と爲す者ハ佛老等を敬すよ過るとなし大約是れ則通國敬する所の神よして別に

各州各府の敬する者幾何なるを知らず我今此等を辯明せゝ即ち眞假分明當に棄つべく當さに放つべきの理を知る可きあり

帝王神を封ずる權あきを論ず

先づ帝王神を封ずるの權あきを辯明して然して後佛老の來歷を論ず可し帝王ゝ尊く且大ありと雖ども亦是我等と同類の人あり生あり死あり只生人を封じて官と爲すの權あり死人を封じて神と爲すの權あると無し只看よ久旱久雨の時帝王尙法を治む可き無し既よ己れ風雨を掌管すると能ゝず反て死人を封じて天地萬物を掌管するの理あらんや若し帝王神を封ずるの權あらゞ必他人を封じて神と爲さずして自家の祖宗を以一大神に封じ子孫萬代を保佑せゞ天下豈美あらざらんや今よ至るまで數十餘朝を換過し以て神を封ずるの事は但明人之を知て假と爲すのみあらず稍明悟あるの人も亦肯て眞と爲して信ぜざるあり

佛を論ず

惜ひかな佛を敬するの人其根を査せず其末を究めず同流合汚妄りに彼を稱して西方の聖人とあす按ずるよ瞿曇即ち牟尼其姓瞿曇父ゝ淨飯王母ゝ摩耶夫人周の照王甲寅の年四月八日よ生る生るゝ時母の右肋を割て出幼より浪蕩よして一世に驕狂す周の穆王五十三年二月十五日身毒瘡を生じて死す其生る時一手天を指し一手地を指し周行七歩して曰天上天下唯我獨尊と云の語明けし後人の妄說按ずるよ瞿曇ゝ淨飯王の太子十九年城を踰て出家學道して

先檀特山に居り後雪山に居り法を得て人を度する是ある
に似たり究竟一居士の類のみ其好殺慓悍の俗に遇て施論
戒論生天之論欲を汚穢と爲漏に是不淨之業出家を要と爲
と說く其志俗の凶暴を止るに繫る故に其當時に補有や亦
多かりあん故に無下に之を看も亦俗士の觀のみ只哀むべ
きに彼上帝を知ざるに似たり故に甘じて世尊無上尊の稱
を受しあらん而して其法も亦從來方便より來が故に其徒
も亦安に方便上に方便を付會し遂に全く其遺法を失しに
似たり今の佛法果して瞿曇の意乎否未可知也當抵慈悲忍
辱を主とし方便を主張す蓋其法に久遠の六佛より傳りた
るあらん去其彼國の經典に本より貝葉に書たるに依り散
逸殊に易く我聖教の如く正傳も無確たる歷史もなし故に

是を度外に於て可也其信ずべきと信ずべからずとに論ず
る迄もなく末世の僧徒法師等が工みに傅會して諸宗を爲亦
何ぞ信ずるに足ん乎其所謂妄に輪廻托生等の一二にて知
られたり之を史上に考るに漢の明帝の時佛毒始て支那國
に流入す惜ひ哉當時の君臣柔弱にして一人の阻滯する者
なく其後惟唐の憲宗の時賢臣韓昌黎なる者あり佛骨を迎
るを諫るの表を奉り佛骨を以て水火に投じて永く禍根を
絕つを求む豈料らんや忠言耳に逆ひ唯上表行れざるの
みならず且潮州に謫せらる中宗の時に迨で賢相狄仁傑な
る者あり巡撫して河南を下り吳楚の淫祠一千七百餘を毀
たんと奏す又宋朝淳祐の時忠臣胡頴なる者あり廣東の經
畧使と爲り佛像を毀つ又神宗の時河南の程顥曾て言ふ佛

老の害い楊墨よりも甚しと嗚呼此より以後佛を闢くの賢人あること少し獨り愚民其騙此を受るのみならず書を讀むの人も亦其欺誑を被り或い銀錢を費し寺廟を建立し或い田産を施して其僧人を養ひ眞假を審よせず邪正を分たずして福祐を希圖し安よ西天を想ふ何ぞ想いざるの甚しきや佛よ事る最も虔心ある者い梁の武帝に過ぎたるいなし日よ齋素を持ち親身佛家の奴とあり裝香洒拂するも後將軍侯景よ臺城よ逼られ氣を忍び饑を受て死す佛若し靈あらば何爲ぞ救いざる今人之を見て醒悟せず惜ひかな哀ひかな

輪廻托生を論ず

佛氏傳ふる所の輪廻托生大よ情理よ近からず彼れ曰人死して能變じて禽獸と成り禽獸能變じて人とある又曰善人死して變じて惡人とある恐くい百年の後人類將よ絶んとし普世將よ盡く禽獸とあらんとす若し果て惡人死する後變じて禽獸とあらば世上の人善者少く惡なる者多し若し輪廻果して是れ眞なれば世人い皆婚配すべからず或い恐る己れが祖母の托生あらんかと若し祖母を娶り妻とあさば豈是大よ人倫を壞らざらんや若し果して輪廻せば是れ田を耕やすよ牛を使ふ可からず行路馬よ騎るべからず恐らくい是れ自家の先祖の托生あらん佛氏又人よ教て曰生を放ち殺を戒しむ毒蛇打つべからず虎狼傷つく可からず惡人律を犯せば尚五刑を受くるを要す惡獸人を傷つくる反當に縱放つ可し是の如く尊卑を顚倒する實よ惡む可きよ

屬す又説く今世より於て肉四兩を食へば來世より於て肉半斤を還す然らば世人肉を食ふ者多く肉を食はざる者少し又生より死に至る迄肉を食ふ幾何あるを知らず若し四兩にして半斤を還さば恐らくは百千世力を盡すも亦還す能はず之を考査するに古より賢人堯舜禹湯文武周公孔孟皆肉を食はざるなし佛氏の言を按ずれば古帝古賢盡く鱗じて禽獸となり以て肉を食ふの償を還さん甚し今人の昏迷なるや佛氏の慢罵を被りて知らず反て生を托するを信じて眞となす痛むべき哉

觀世音を論ず

觀世音は本印度の菩薩梵語に伐嚕枳帝濕伐羅と稱す唐に觀自在と翻す衆生億萬の苦惱を觀じて自在に之を救拔するの意あり又觀世音と云ふは世間の音聲に觀して其苦を解脫せしむるの義にして其神力の巍々たるとは各經典の説相に詳なり然れども之れ靈山會上の一菩薩にして釋迦の支配を免かれざる者也原ぬるに彼普門品の説に因る時は大恩教主の傲稱ある釋迦牟尼の神通力より一昏超出せし者の如くにして其身未だ菩薩の位に住して如來地に至ると能はず碌々として釋迦の部下に屬し首を揚るの權あきを如何せん而かのみならず此菩薩が釋迦在世の時に在て不思議なる利益を一々顯せしともあきに何んぞや釋迦獨何の見る所あつて觀音が此の如き神變を行ふとを保證せしや觀音も亦この詞に甘んじて敢て謙退の色あるを見ず釋迦又曰娑婆世界皆之を號して施無畏者の名を稱

すとこれ又妄言取に足らず當時娑婆世界の何人か此稱を彼れよ興へしや蓋釋迦の濫賞よ係るのみ又其遊舍の地を補陁落迦と云ひ山よ奇花紫竹妙音の禽獸ありとこれ何れの所あるや今印度の地圖よよるよ其方向さへも詳あらず思ふに竺土の僧徒東土よ入り猥りよ己の生國を誇稱して清淨の境界とあし恣に經卷を翻譯して虛名を揑造し人々を眩惑せしよ疑ひなき者なり嗚呼釋迦の涅槃既よ久しく其貝葉も何くよか散逸して全文を還すあきよより盡く點智の僧徒等が東土人の通ぜざる梵語梵字を以て飽迄も私論を主張せし者よして所謂兒戲の論あるのみ又之を思考するよ觀音よ此の如き利益あるとを釋迦が說しや說ざるやこれ又未だ審かならず故よ普門品の說相も渾て皆虛誕

揑造の大僞說たる辯言を費ずして知るべきなり假令へ釋迦が之を說くよもせよ皆天主を差置きたる私說よして釋迦い固より方便家の無上士あれば何も論ずるよ足ず況んや其糟粕を嘗むる僧徒の如きをや又之を拜する多人をや其餘三十三身化現十一面馬頭準提千手千眼等皆方便妄誕何ぞ上帝の上よかゝる怪化の者有る理あく又上帝の下よかゝる怪物が造られて禍福を爲を得んや明矣

肉を齋して蛋を齋せず又本族等の物を禁ぜざるを論ず

客曰奉教人獨り肉食を禁じて水族猪膏鷄蛋等の物を禁ぜざるは何の故ぞ

曰齋を守るい原と已よ克て心を清ふし慾を寡ふするが爲

めあり禽獸の肉味濃厚能人の血氣をして壯強ならしむ人心強壯なれば私慾必ず盛也若し能私慾を清するを要せば必ず禽獸の肉を戒むべし然ども亦己よ克と太だ過ぐ可からず唯中庸を之れ德とす若し己よ克と太だ過れば必身力衰弱疾病を生ぜん唯各人の本分を盡すのみ又水族の味薄微よしで能身を養ふと雖ども血氣を助くるよ限あり故に之を禁ぜず又當さよ知る可し規矩法度時ありて免す可し聖經の齋規を論ずるに原と猪膏鷄蛋等の物を食ふを禁ず然れども聖會ハ慈母の子を愛するが如し寛免の權あり故よ教中の人に准して之を食ハしむ若教令太だ嚴なれば必守り難し但中を以て貴とし人をして容易よ遵行せしむ剩へ聖教會よ於て之を禁戒するの權あれば亦之を允許する

の權あり蓋し人々を保助救育するを以て勤務と爲が故よ天主より這權を授與し玉ふ所あり

何故聖教妾を娶るを許さゝるを論ず

客曰天主十誡の中よ第四誡人をして父母を孝敬せしむ乃理の當然唯六誡人の妾を娶るを禁ず乃ち太だ過つあからんや若し子なき者妾を娶る能はずんば將よ其後絶んとす孟軻曰不孝よ三つ有後なきを大とす故よ子無き者ハ妾を娶りて子を産まずんば不孝の罪を逃れ難し

曰く一夫一婦ハ天主の定命あり只看よ天主人を造りし初め一男一女を造り配して夫婦とおし人類を傳生せしむ未だ一男二女一女二男を造らず故よ一夫一妻を以て上主の定命とし人意よ任せて之を改るを得ず若し孝道の說を

論せば男女に均き歟妻に子あくんば夫能く一妾を別よ娶り以て子を生で孝道を全す若し夫子無んば妻も亦別よ一夫に謀り子を生み以て孝道を全して可あらんか不可あらんか夫れ一女二男よ配す可からず然れば一男も亦二女よ配す可からず又子あり子あきに皆天主の命人強て求む可からず抑世間字を識り書を讀むの人男女匹配のことを論ずれば必孔子の言よ遵ひ之を尊敬する極めて至れり今此迷蒙を破らん夫三代の風習元來艸昧の始より出て如得亞國の古風の如く數婦を擁せしなり且是等に後人好色の沙汰の如きよもあらず眞よ後無く血食せざるを不孝とする人の良心より妾を擁するものありけん故よ孔子も其風を承來りたる者よて固より天主に非ざれば禮を制するの權あき故沙汰せざる也假令孔子禮を制する共風習に從て制すべければ妾を擁するも亦是とせん是上帝を知ざれば也則ち先よ論ずる所の孔子の道未だ美を盡さゞる所あり今上帝の教よ付て其始よ溯り其理を推ば義理として妾を置べきよ非ず子孫の先祖に追養せんとて食を備るも其靈魂是を受ること能はず然れば何程血統聯續すとも益あらん其益なきを知りつゝ妾を置くに好色貪慾よ非ずや且妾と夫人より亂の生ることに歴世の史よ閲すべし夫れ妻妾必反目する者多し妻妾必妬心ある者多し或に妾子女を生み妻の毒害よ竟る者あり或に妻妾を容るゝ能はずして妾殺する者あり或に妾寵を得て妻を毒死する者あり或に妻妾俱よ子女あり各自ら護愛して終身の仇恨を致すもの有り

以て一家睦しからず上下和せずして實ょ刀劍を床幃ょ伏して悟るを知らざるを致す哀哉淫を好む人家の害を顧みずして只本身目前の樂逸を圖る故を以て後あきを不孝とあすの語を借りて以て其好色の心を飾る何ぞ想ざるや淫ハ萬惡の首たり淫ある者必孝ならず孝なる者必淫あらず一婦二夫あれバ必稱して娼妓とあさん一夫二婦あれバ汝將ょ何を以て之を稱せん我是を以て心を剖き血を瀝らし切痛以て之ょ告げずんバあらざるあり

如何ぞ教内の女多く貞を守りて嫁せざるを論ず

客曰天主聖教妾を娶るを禁ず實ょ正理ょ屬す隙を容る可き無し試に問ふ奉教の人多く終身嫁せざる者あるは何の故ぞ蓋し天主人を生ずるや男あり女あり定るょ婚配の禮

を以てするハ原と人類を傳生するが爲めあり今終身婚嫁せず豈天主人を生ずるの意と相反せざらんや若し普地の女人皆出て嫁せずんバ百年の後人類盡く絶へなんとす

曰汝普世の女皆貞潔を守れバ人類將ょ絶んとするを說く若し此の一端を論ぜバ汝ぢ必分外に心を勞するを煩らはさずして當ょ貞を守るハ容易ょ非るを知るべし若し高志貞烈の性有女と雖も若天主の意ょ非れバ決して全く貞を守ると能はず是天主の撰擇ょ係るや疑あし故ょ汝過慮する勿れ夫れ一百の女ょ貞を守るを勸むと雖ども猶恐くハ一人の從ふを得難からん何ぞ輾轉思を焦し人類の將ょ絶んとするを怕るゝを煩さん汝天地の間靈性有の物を知る也要す之を分て三等とあす上等ハ天使中等ハ人類下等ハ

禽獸なり匹配傳生の事は獨り人類のみあるよ非ず禽獸魚蟲皆然らざるとなし唯天使ハ天ヨ在りて常ヨ天主の左右ヨ侍し婚娶せず故ヨ烈性守貞の人世俗を輕じ本身を苦しめて專ら天主ヨ事ふるハ獨り夫婦ヨ超過するのみあらず且其像ち天使に似たりと謂ふ何ぞ想はざる數外の女聘を受て未だ嫁せざるヨ其夫天亡し節を守て以て身を終る者ハ人々之を嘉し皇帝ハ牌を坊に立て貞德を表すこれ何の爲めぞや此の如くある貞德ハ乃ち大德の表にして實ヨ修め難けれバあり故ヨ牌を坊に立てゝ芳を百世ヨ流し他人を誘て之ヨ法らしむる也故ヨ古より今ヨ至る迄常ヨ貞潔ある者の牌坊を見ると雖ども未だ夫婦の牌坊を見ず此ヨ依て辯じ來れバ孰れか貴き孰れか賤き白黑分明あらん若し貞を守て嫁せざれバ天主人を生ずるの意ヨ相反すると何ぞ思ハざる生を生する者是天主死を死する者も亦豈天主ヨ非ずや且天主未だ天地を造らざる先幾千萬年未だ一人を生ぜざるを知らず汝將ヨ何を以て之を解せんとす又昔世の人童身を守り專ら天主ヨ事へ己が靈魂を救ひ天堂の永福を得人類をして絶へしむるも此の世の爲めヨ大害なし今世の人眞主を棄て酒色を貪り男女淫ヨ習ひ罪惡盈貫して天主の義怒を招き身後の永苦ヨ陷るを致す豈悲むべきの至あらずや汝心を操り此を爲さずして反て心を勞して彼れを爲すハ何ぞや

何爲ぞ道を傳ふるヨ人家を離れ父母ヨ事へざるを論ず

客曰汝等傅傳先生人を勸めて上ハ天主を拜し下ハ父母を敬す其意美なりと雖ども未だ善を盡さゞるハ何ぞや汝等鄉を離れ外ゝ出でゝ雙親を棄て生ゝ奉養する能ハず死を安葬する能ハず此の如く言行符せず何ぞ以て人を敎んや孔子云父母在せバ遠く遊バすと汝等夫子の言ゝ遵ハず又何を以て道を抱き世ゝ訓し恐らくハ此の疑を懷く者我一人ゝ非ず若し能く茅塞を啓開せバ獨り我一人の疑を開くのみならず亦且群疑の惑を去らん

曰く此の疑を解くを要せバ我先づ畧ぼ數端を提げて之を醒さん第一父母ゝ兩樣あるを知る可し我を生むの父母あり我を造るの父母あり故ゝ天主ハ天下人類を造るの父母たり身を生むの父母ハ宜しく孝敬すべし豈我等を造成裝存するの父母ゝ孝敬せざるべけんや既ゝ天主ハ吾人の公父たれバ則ち天下萬民吾人の兄弟たるを知るべし如今世人患難將ゝ危からんとす肉身の難あり靈魂の難あり肉身の難ハ大ありと雖ども百年ゝ過ぎず而して靈魂の難ハ此の時ゝ救ハずんバ必ず永遠無窮ゝ至る今譬へバ汝常に家ゝ在りて父母ゝ事へ汝の兄弟外ゝ在て偶大難ゝ遭ふと聞かバ汝必ず少く父母を辭し行て兄弟を救はん若し汝聞て往て救はずして家に在て父母ゝ服事すと云ハゞ人汝を稱して孝と爲さゞるのみならず反て汝を仁あらざる人と謂ふ可し今我等天主を以て大父となし天下を以て一家と爲し萬民を以て兄弟とす今衆人を見るゝ異端ゝ沈み邪說ゝ迷ひ良心を埋沒し眞主を背棄し生てハ邪魔の奴となり死

して〻地獄永遠の萬苦を受く豈安坐して救〻ざることあらんや況んや吾父母已に聖教に遵ひ誡を守り主を敬すれば身後必天堂の眞福を受く可し我ら暫く父母に別れて兄弟の沈溺を救ふ誰か不可と云〻ん試に親に昔禹王水を治め民の患を救ふが爲めに外に在る八年三たび其門を過て入らず後人以て怪と爲さず反て稱して賢王となす而して當時禹王の世人寡く德厚く異端邪說なし禹猶且汲々として家を棄てゝ顧みず以て下民の災を救ふ然るに今日の災〻昔日に比ず可きに非ず之れに更ふるに人性傾頽風俗敗澆邪說侵淫禹王倘し今世に在らば獨り八年歸らざるのみあらず必ず終身返らずして災を救ひ死して後ち已まんのみ

第二若し父母只一獨子を生めば聖教會も又其道を修め書を讀み以て人を化するを許さず倘し修道を要せば必ず先づ父母を安置し老養終身の需め或〻親友に托して形神の務を照顧し終に以て安心慮かりあかるべし是正に上安く下至しと云可し第三嘗て多の人を見るに終身父母を離れず雖ども其正命を聞かず其善訓を受けず凶を行ひ惡を爲す至らざる所あし父母の樂とあらず反て父母の憂とある汝之を責めず反て彼を責るゝ何ぞや我ら父母を離れ遠く遊び外に在りと雖も遊ぶと必ず方あり亦嘗て音信を往來し其憂を慰め其心を樂ましむ是の如き人を汝稱して不孝とあさば世に一孝子あからん汝今義理を詳にせずして是非を顚倒せり孝ある者を逆とあし逆ある者を孝とあす

ハ又何ぞや

傳教師婚せざるの好處を論ず

客曰上文の辯する所獨り吾疑を解くのみならず且義理金鋼隙の鑽す可きあし然るよ一條あり敢て問ふ昔孔子道を傳て人を化し列國を周流す然も亦家室を有て其祖を繼ぐ今汝等道を傳ふるの士終身婚娶せず宗を絶ち嗣を絶つハ何の故ぞや

曰五端を揭て以て答へん第一彼も一時此も一時なり當時人少く德盛あり以て二職を兼ぬべし今世人少きよ非ず只德衰るよ在るのみ天下寧ろ人無る可きも道無かる可きよ非ず若し人只子を生むよ務て道を傳ふるよ務めずんバ人幾ど禽獸よ近し孟軻曰逸居して教なけれバ禽獸よ近しと

第二當よ視る可し普世の人猶一身の如し一身皆手なれバ何を以て步走せん一身皆眼なれバ何を以て聽をせん必百体四肢有て高低上下方よ以て生命を保養すべし之を農夫に比せバ穀萬石を收バ盡く存留して來年の種と爲んや必一分を以て君王よ奉ずる也故よ世人の中よ生を傳る者と道を傳ふる者と有る可し二者皆缺く可からず第三上主を祭るハ必ず神形清潔あるを要す女色に近て之を汚すべけんや第四世人の通病ハ只財色の二字よ迷ふよあり善醫病を療する必寒を以て熱を攻め熱を以て寒を攻む今我ら自己の本家當さよ得可きの財を捨てハ人よ勸るよ非義の物を取らざらしめ邪婬の樂を圖らざらしむ故よ道を傳る者必先づ己よ克て人を服すべし第五我等主あしと雖も家中

皆姪子姪孫あり其祖を繼ぐとも亦嗣を滅す可からず又人死するの後遺す所の死屍親子之を葬るも腐爛す何の擇ぶとかこれ有らん總て之を言へば婚娶する者只凡人の數を增し道を傳へて娶らざる者は反て聖賢の數を增す孰れか貴き孰れか賤しき黑白分明多辯を用ひず

奉教難しと言ふ可からざるを論ず

客曰靈魂を救ふが爲め理當さに教を奉ず可し吾細かに教のことを考査するに實に難しとあす如何

曰信ずる難きか亦是誡を守るの難きか二者皆難しと謂可からず第一聖教の道理に根あり源あり又天地萬物共に至尊無對の主有るを鳴さぺ容易に信服せざる者あし愚人あり安に天地無主を說くと雖ども然れども眞心實語に非ず是れ辭を强ひ理を奪ひ以て己の私慾の心を寬むるに過ぎず然も時窮り勢倉皇に迫るが如き或い危病患難危險に遭ふ時に至りて內心自ら天主有るを覺へて思はず天を呼で救を求るなり故に信じ難きを以て推辭す可からず第二既に一至公至義の天主あり吾人一不死不滅の靈魂あり身後無窮無數の賞罰あり此の賞を得其罰を免かるれぺ湯に趣き火を蹈むと雖ども亦以て難しとす可からず當さに地獄の苦みを知る可し以て形容し難し今世の苦を以て之を地獄の苦に較ぶるに蟬翼の如し天下古今の刑を以て之を地獄の刑に較るに有る無きが如し世人最とも重きの苦い是一死のみ然れども惡人地獄に在て死すると無く極凶極

重の刑罰を受く嗚呼此の永遠の二字を思ふ可し之を蒼海の水と比するに萬年に一滴を汲と雖も終に能く之を汲み盡す可し浮世の沙礫萬年に一粒を去ると長久なりと雖も終に全く去る可し地獄の苦に至て然らず海水盡ると雖ども沙礫全く去ると雖ども其苦依然として起初の如し此の永遠の苦を免るゝが爲に獨り爵祿辭すべく白刃踏むべく夫れのみならず粉身碎骨の刑を受ると雖ども亦難せず今夫美利の得可きを見れば苦を厭はず功名を求る者は日夜書を讀み神を費して難とせず粟米は風に耕し雨に鋤し寒暑暴露以て苦と爲さず嗚呼天堂の永福を受け地獄の永苦を免るゝが爲に反て誡を守るを以て難と爲すは惑の甚き者なり何ぞ想はざる誡命を守らざる者は更に難

き所あり富豪の家を見よ一日家敗れ人亡て跡なし其故を問へば奢費浪蕩賭博爭訟するが爲めに此を致すと多く强壯の人あり一日身衰へ力弱く癈病身を終ふ其故を問ふ或は飲食節なく淫慾度に過るを以て之を致すと又多く美名の人あり先きに鄉人之を尊び朋友之を敬せしが一日衆之を惡むこと仇の如く之を避ること毒の如し其故を問へば忤逆傲慢奸情倫盜するが爲めに此を致すと嗚眞心敬を奉じ誡を守るの人此の難あらんや誡を守るの人は心中常に安く家内常に和す内に在ては家人之を愛し外に在ては鄉人之を敬し死後衆人之を思へり世に居るとき身貧しく家寒ありと雖ども一心全く天主の命を聽て天堂永福の望あり苦ありて其苦を覺へず憂ありて其憂を覺へず是の如

く反覆辯明せゞ汝誠の難きを以て推辭をなすを得んや

外教の人善功を行と雖ども天堂の眞福を得難きを論ず

客曰外教中亦許多の善人あり天主を敬せずと雖ども亦多の好事を行ひ貧を濟ひ患を救ひ橋を修め路を補ひ節を守り身を修るの如きゝ亦善良と云ふ可し此の如き人死して後天主亦之を天堂より賞するや否や

曰君王の賞を得んと欲する者ゝ必當よ忠を盡す可し父母の愛を受んと要する者ゝ必當よ孝を盡す可し若し忠行あらざれゞ賞を望む可からず反て罰を懼るべし譬へゞ一臣あり百行皆善よして獨り其君王を敬せずとれ君王の賞を望む可けんや一子あり萬事皆善獨り其父母を認めずとれ父母の愛を望むべけんや故に凡天主を敬せざる者ゝ許多の善事を行ふと雖ども天堂の賞を得難し何とあれゞ其善事天主を愛するが爲めよ作さゝるよ由る是但名利の二字の爲めよ作すのみなれゞ也名利の爲よして又焉ぞ天堂の賞を得ることあらんや

教を奉ずる遲緩す可からざるを論ず

客曰既よ初より此よ至る迄天主聖教の公明正大あるを確知して疑の尋ぬべきなし愚者をして明かよ賢者をして醒めしむ篤く信じて之を行ふ者生てゝ聖賢たり死して永福を得而して今時教を奉ずるよ不便あり來年を待て可あらんか

曰乾則來人の見なり邪を棄て正よ歸するよ何ぞ來年を待

たん即ち今日暗くして明かよして今日之を改むるも既に晩し何ぞ來年改むべくして今年は改むる可からざる比へば父母よ孝敬するが如き必ず來年よ到るを待たんや昔て此の人を見るに日一日を遲くし年一年を緩くす罪惡愈深きよ至るよ迨で愈〻改め難し卒然死期既よ至らば來年の望み終に得べからず吾人の大事ハ身後永遠の二字よ在り或ハ苦しみ或ハ樂む死するとき一度定て永く改るを能ハず又吾人皆死を免れず然れども何の時何の地何の樣よ死するを知らず時々預防すと雖ども猶及ばざるを恐る汝亦放心して來年よ到るを待たんや又吾人の生命最も脆く最も薄く損じ易く壞れ易く實よ單絲の線よ千鈞の重きを繫ぎ上ハ無極の高きよ懸下ハ不測の淵よ臨むが如し又風雨寒暑の時侵害するあり呼吸の間絲線一度斷ぜば必深淵よ落ちて永く復た出でず汝尙來年と謂ふか幼年妻を娶り子を生で以て老を防ぐ夏時穀を種て以て冬を防ぐ尙延緩懈怠すべからず而して死期或ハ今夜よ在り或ハ明早よ在り又一刹の間だ普世の人死する者幾何ぞ知らず汝尙來年と云て可ならんか吁速よ頭を廻して後悔の及ざるを免るべし

聖教理證卷之二終

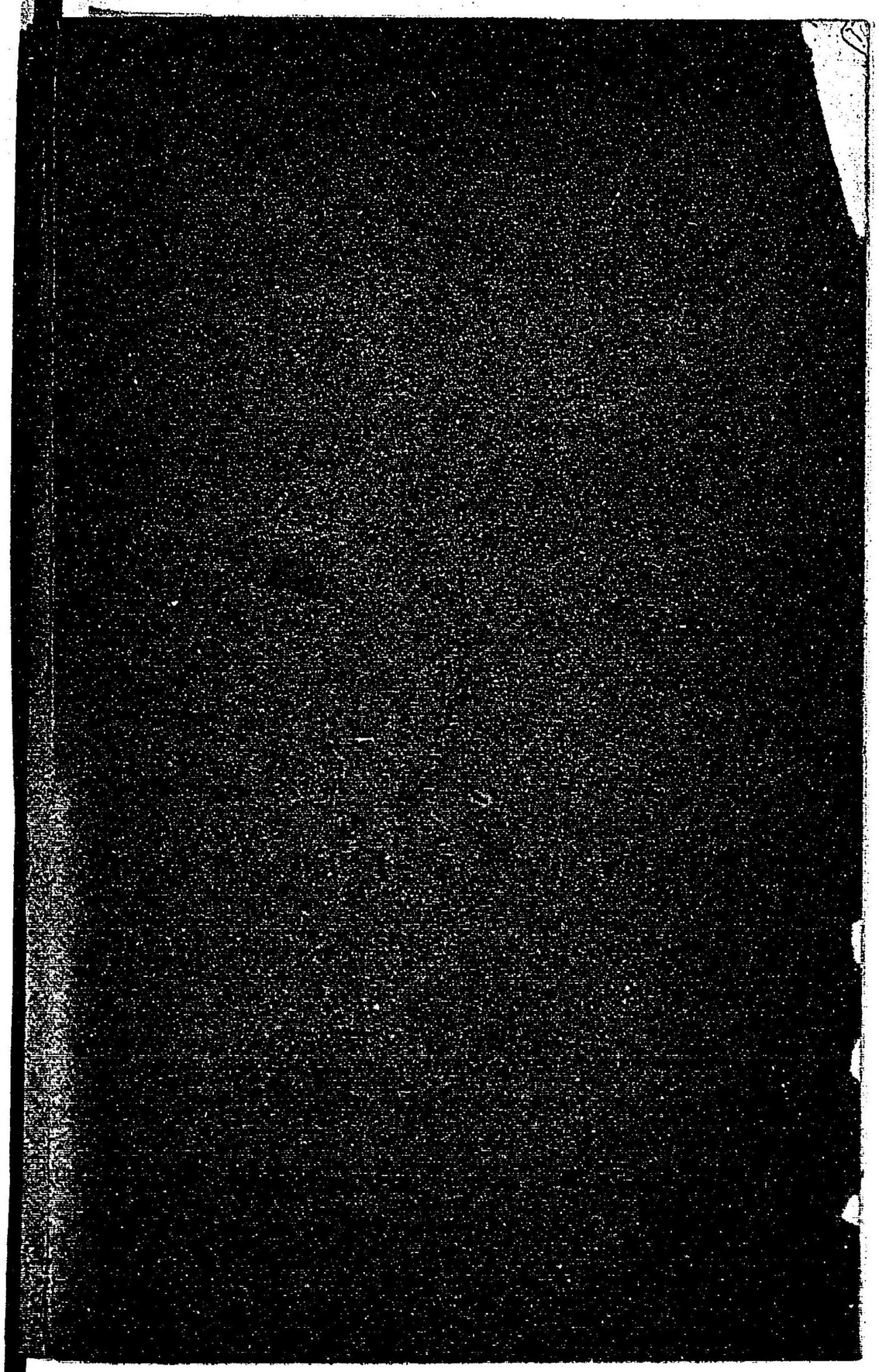
明治廿六年十月二十日印刷
明治廿六年十月廿七日發行

發行者　愛知縣名古屋市主税町五十九番戸
牧野重國方
菅井三九郎

印刷者　東京日本橋區新和泉町一番地
瀧川三代太郎

發行所　愛知縣名古屋市主税町
名古屋天主教會

印刷所　東京日本橋區新和泉町一番地
今古堂活版所



020893-000-8

特18-168

聖教理証

名古屋天主教会／刊

M26

ABI-0727

特
1